## しなごろうたろうどのご

ほしなごろうたろうどのごへんじ

## 星名五郎太郎殿御返事

ぶっぽうしんたん に居せりといえども、大河の流れ、 を末法に受くといえども、霊 仏法震旦に流布し、梁の代に百済国の聖明王より我が朝ぶっぽうしんたん るふ りょう よ ひゃくさいこく せいめいおう お ちょう とぼそに臨みしより以来、 の人王三十代欽明の御宇に仏法初めて伝う。それより已来、 一切の経論・諸宗、皆日域にみてり。幸いなるかな、生いっさいきょうろん しょしゅう みなにちいき 満 さいわ にんのうさんじゅうだいきんめい 漢の明、夜夢みしより、 めいよるゆめ のぞ 文永 4 年 (67) ぶんえい ねん このかた ぎょう りょうぜん とう 迦・竺二人の聖人初めて長安の 唐の神武皇帝に至るまで、天竺の 12 カュ ぶっぽうはじ 月 5 山のきき、耳に入り、身は辺七ワぜん 聞 みみ い み へんど しんぶこうてい じくににん 日 たなごころ 掌 に汲めり。 つた 46 歳 さい しょうにんはじ いた 星名五郎太郎 ほしなごろうたろう ちょうあん てんじく ちよう このかた

して、 前後のおもむきあり。もしこの義に迷いぬれば、 罪よりも 甚 だしきなり。ここをもって、世を厭い道を願わ ぜんご つみ 命終の時、 ひと ただし、 故に、 仏法を習うといえども還って十悪を犯し五逆を作るぶっぽう なら かえ じゅうあく おか ごぎゃく っく ゆえ まずこの義を存ずべし。例せば彼の苦岸比丘等のご とき はなは 委しく尋ね見れば、仏法において大小・権実・ くわ たず み ぶっぽう だいしょう ごんじつ まさ 正に阿鼻獄に堕つべし」と云えり。 だいきょう 大経に云わく「もし邪見なることあらんに、 あびごく お ぎ じゃけん か いと じゃけん 邪見に 住 くとう どう じゅう

りといえども、随分、後世を畏れ、仏法を求めんと思う。願りといえども、随分、後世を畏れ、仏法を求めんと思う。願がいると、 ばいばん ごせ おそ ぶっぽう もと おも ねが

何をもってか邪見の失を知らん。予、不肖の身たなに

ふしょう

じゃけん

問う。

わくはこの義を知らん。もし邪見に 住 せば、ひるがえして じゃけん じゅう

正見におもむかん。

こた 答う。凡眼をもって定むべきにあらず。浅智をもって明ら ぼんげん さだ

むべきにあらず。経 文をもって 眼 とし、仏智をもって先と まなこ ぶっち

せん。ただ恐らくは、もしこの義を明かさば、定めていかり いきどお おそ ふく さだ ぶっちょく

をなし、 憤 りを含まんことを。さもあらばあれ、仏 勅を せにん

をいやしむ。ただ愚者の行いなり。それ、もし非ならば遠 重んぜんにはしかず。それ、世人は皆、遠きを貴み、近き

まも

とお

たっと

ちか おこな

くとも破すべし。それ、もし理ならば近くとも捨つべから

伝え聞く、彼の南三北七の 十 流 の学者、威徳ことに勝れ 人貴むとも、非ならば何ぞ今用いん。 なんさんほくしち じゅうりゅう なん いまもち

も、陳・隋二代の比、天台大師これを見て邪義なりと破す。 て天下に尊 重せられしこと、既に五百余年まで有りしかど ずいにだい そんちょう ころ てんだいだいし すで ごひゃくよねん じゃぎ

天下にこのことを聞いて、大きにこれをにくむ。しかりと いえども、陳王・隋帝の賢王たるによって、彼の諸宗に天台いえども、陳王・隋帝の賢王たるによって、彼の諸宗に天台

を召し決せられ、邪正をあきらめて前五百年の邪義を改 けっ じゃしょう 明 さきごひゃくねん じゃ ぎ あらた

め 大師は、 皆ことごとく大師に帰す。また、 南都・北京の碩学と論じて仏法の邪正をただす なんと ほっきょう だいし せきがく ぶっぽう 我が ちょう 朝の叡山の根本 じやしよう えいざん こんぽん

こと、 当世の道俗・貴賤、皆、人をあがめて法を用いず、心 とうせい 経文をさきとせり。 きょうもん どうぞく きせん みな ひと

をもって一実の正法を謗ず。これらの類い、あに大乗誹謗 ごんきょう を師として経によらず。これによって、あるいは念仏・ 権教をもって大乗妙典をなげすて、あるいは真言の邪義
こんきょう だいじょうみょうてん 投 捨 いちじつ きょう しょうほう だいじょうみょうてん だいじょうひ ぼう

む人もかくのごとくなるべし。 那落の苦しみを受けざらんや。これによって、その流れをくゅらく、くる のやからにあらずや。もし経文のごとくならば、いかでか輩。

疑って云わく、「念仏・真言は、これ、あるいは権、

るいは邪義。また行者、あるいは邪見、あるいは謗法なり」 ぎょうじゃ

と、このこと、はなはだもって不審なり。その故は、弘法大師 こんごうさっ た だいさんじ ぼさつ ゆえ しんごん こうぼうだいし

は、これ金剛薩埵の化現、第三地の菩薩なり。真言は、 けげん

れ最極甚深の秘密なり。また、善導和尚は西土の教主・弥陀 さいごくじんじん ひみつ ほうねんしょうにん だいせいしぼさつ ぜんどうおしょう さいど きょうしゅ

如来の化身なり、法然上 人は大勢至菩薩の化身なり。 しようにん じゃけん ひと

のごときの上人を、あに邪見の人と云うべきや。

答えて云わく、このこと本より 私 の語をもってこれを もと わたくし ことば

真言の教えは最極の秘密なりというは、三部経の中におい 難ずべからず。 経 文を先としてこれをただすべきなり。 さいごく きょうもん さき さんぶきょう

法の中において第一なりということを見ず。およそ仏法と べきことなり。もしこの義に依らば、 経と 経とを合わせ に定むべし。これ程の 理 をば、いかなる人なりとも知る てこれを挍すべし。今、 法華経には二乗成 仏あり、 真言経 いうは、 て蘇悉地経をもって王とすと見えたり。 全く 諸 の如来の そしっじきょう 善悪の人をえらばず、<br />
皆<br />
仏になすをもって<br />
最第一 ひと いま ことわり ほけきょう みなほとけ にじょうじょうぶつ きょう きょう まった もろもろ にょらい しんごんきょう

法華経には女人成 仏これ有り。 真 言経にはすべてこれな ほけきょう し。 法華経には悪人成 仏これ有り。 真言 経には 全 くなし。 にはこれ無し。あまつさえ、あながちにこれをきらえり。 ほけきょう にょにんじょうぶつ あくにんじょうぶつ しんごんきょう しんごんきょう まった

なに じっぽう 何をもってか法華経に勝れたりと云うべき。また、もしそ これなり。また、多宝の塔、大地より出でて、分身の諸仏、 し、白 毫 相の 光、上は有頂を極め下は阿鼻獄を照らせる、 の瑞相を論ぜば、法華には六瑞あり。いわゆる、 ずいそう びやくごうそう ろん きた ひかり ほけきょう たほう かみ うちょう とう だいち ろくずい きわ しも あびごく じょうぎょう とう ふんじん しょぶつ 7 雨華·地動 うけ ぼさつ じどう

六万恒沙・五万・四万・三万、乃至一恒沙・半恒沙等、大地ろくまんごうしゃ ごまん しまん さんまん ないしいちごうしゃ はんごうしゃとう だいち よりわきいでしこと、この威儀不思議を論ぜば、何をもついぎょしぎ、3ん なに なに 十方より来る。 しかのみならず、上 行 等の菩薩の

て真言法華にまされりと云わん。これらのこと、委しくのぶ しんごんほっけ

るにいとまあらず。わずかに大海の一滴を出だす。

号す。この書に云わく「ただ真言の法の中にのみ即身成仏 す。故に、これ三摩地の法を説く。 諸 教の中において闕い てしかも書かず」と云えり。この語は大いに不審なるによい ことば おお ふしん ここに菩提心論という一巻の文あり。 さんまじ ほう いっかん しんごん しょきょう ほう りゅうみょうぼさつ 竜 猛 菩薩の造と なか そくしんじょうぶつ

って、 ども、 即身成仏の人全くなし。たといありとも、 そくしんじょうぶつ きょうもん 経文に就いてこれを見るに、 ひとまった そくしんじょうぶつ 即身成仏の語は有 法華経の ほけきょう

中に即身成仏あらば、「諸教の中においてかいてしかもかなか そくしんじょうぶつ しょきょう なか かず」と云うべからず。このこと、はなはだもって不可ない。 しょ まった りゅうみよう

り。ただし、この書は 全 く 竜 猛 の作にあらず。委しき旨

出ず。 竜樹 諸仏出世の本意、一大事の因縁をやぶるにあらずや。今、 りゅうじゅ ごとくならば、別しては竜 樹の大論にそむき、総じては 一乗作仏なきはこれ顕 教」と云えり。 もし菩提心論の 語の にじょうさぶつ なり。故に、大論に、一代をのぶる肝要として、「般若は秘密 しょぶつしゅっせ り」と云えり。また云わく「二乗作仏あるはこれ秘密、 にあらず、二乗作仏なし。法華はこれ秘密なり、二乗作仏あ 別に有るべし。たとい 竜 猛 菩薩の造なりとも、あやまり 付法蔵二十四人のその一りなり。何ぞかくのごとき ふほうぞうにじゅうしにん 天親等は、皆、 てんじんとう にじょうさぶ つ ほんい だいろん いちだいじいんねん けんきょう いちだい しゃくそん せっきょう 釈 尊の説 教を弘めんがために世に りゅうみょうぼ さっ りゅうじゅ ほっけ にじょうさぶっ かんよう だいろん ぞう ひみつ ひろ ぼだいしんろん にじょうさ ぶっ そう ことば ひみつ

真言に一代を摂するとして法華を第三番に下し、あまつさ

しんごん いちだい せっ ほっけ だいさんばん くだ 妄説をなさんや。 如来の所説の中に第一なり」と云えり。また「已今当の三には、これには、たれになった。」と云えり。また「已今当の三には、これとう」と え戯論なりと云えり。謹んで法華経を披きたるに、「諸の時に、」 と何ぞ日輪に勝れん。高きこと何ぞ須弥山に越ゆること有なんにはりん。すぐ、これのなん、しゅみせん。こ この 大海にたとえ、日輪にたとえ、 しんごん にいわんや法華に並べんや。しかるに、 に勝れたり」と見えたり。また、薬王の十喩の中に、法華を 義に依らば、 いちだい しょせつ なか にちりん なら 彼の真言はこれ般若経にも劣れり。かしんごん はんにゃきょう おと 深きこと何ぞ海にすぎん。 ふか つつし なん ほけきょう うみ 須弥山にたとえたり。もし しゅみせん やくおう ひら 弘法の秘蔵宝鑰に、 こうぼう じゅうゆ 明らかなるこ なか いこんとう ひぼう ほうやく もろもろ ほっけ さんせつ

喩えをもって知んぬべし、 だいにちきょうとう まった 何をもってか法華に勝れない おの

たりと云わんや。 大日 経等に 全 くこの義なし。 ただ己が見 に任せて永く仏意に背く。 なが ぶつい

よ」と云えり。法華経を指して華厳に劣れりと云うは、 みょうらくだいしい 妙 楽 大師曰わく 「請う、 眼 有らん者は委悉にこれを尋ね ほけきょう まなこあ けごん も の

ほとけ に 眼 ぬけたるものにあらずや。また 大 経に云わく「もし 仏 の正 法を誹謗する者あらん、正にその舌を断つべし」 まなこ 抜 しょうほう ひぼう もの まさ だいきょう

と。ああ、 は生々にぬけて見ることなからん。しかのみならず、 しょうじょう 誹謗の舌は世々において物云うことなく、邪見の

ひぼう

ものい

じゃけん

えば みようじゅう 須陀洹・斯陀含・阿那含・ く畏るべし。これはこれ大邪見の 輩 なり。 ゆえに如来誠 諦 法然も、 ほうねん しゅだおん の金言を按ずるに云わく「我が正 法をやぶらんことは、 の謗法の流れを汲んで共に阿鼻の て無間大城に堕ちて無量億劫のくるしみを受けん。善導がはんだいじょう。おしなりょうおっこう。苦しみを受けん。善導のとうだいによう。 命終して、 「もし人信ぜずして、この おそ きんげん ほうぼう むけんだいじょう 猟師の身に りょうし ひとしん あん しだごん なが これに例して知んぬべし。誰か智慧有らん人、これに例して知んぬべし。誰か智慧有らん人、これに対して知る。 阿鼻獄に入らん」の文のごとくならば、定め あびごく < に袈裟をかり あなごん むりょうおっこう とも だいじゃけん 阿羅漢・辟支仏、および 仏 の色身 あらかん けた きょう 経を毀謗せば乃至その人きょう きぼう ないし ひと しょうほう やから るがごとし。 ほのお しゃくしぶつ 焰にやかれん。 行者 ほとけ によらいじょうたい あるい ぎょうじゃ よ しきしん は

等 の 流 なが また耆銭仙人の四大海を一日の中にすいほし、 本尊として男女の愛法を祈り荘 園等の望みをいのる。かく を現じて我が正法を壊らん」といえり。

ばん

お

しょうほう

やぶ ほんぞん たぶらかし、如来の正 法を滅ぼす。なかんずく、彼の真言 阿竭多仙人は、十二年の 間、恒河の水を耳にたたえたりき。 のごとき少分のしるしをもって奇特とす。もしこれをもっ て勝れたりといわば、彼の月氏の外道等にはすぎじ。彼の 今、 いま たせんにん この善導・法然等は、種々の威を現じて愚癡の道俗を れ、ひとえに現在をもって旨とす。いわゆる、畜類を しょうぶん ぜんどう なんにょ によらい じゅうにねん あいほう いの しょうえんとう ほうねんとう げんざい しょうほう あいだ ごうが みず かがっし ほろ きどく むね げどうとう のぞ みみ 拘留外道は くるげどう ちくるい どうぞく しんごん

はっぴゃくねん ほどにびるさなの身と成りし、その威徳を論ぜば、いかん。 曇仙人が十二年のほど釈身と成り説法せし、弘法が刹那のどんせんにん じゅうにねん しゃくしん な せっぽう こうぼう せっな 八百年の間石となる。あにこれにすぎたらんや。また、 し彼の変化のしるしを信ぜば、 あいだいし かれいとく すなわ げどう しん 即ち外道を信ずべし。当 いとく

まぬかれず。いわんや、わずかの変化においてをや。いわ 知るべし、 彼威徳ありといえども、なお阿鼻の 炎を

り。近付くべからず。畏るべし、 大乗誹謗においてをや。これ一切衆生の悪知識な だいじょうひ ぼう おそ 畏るべし。 いっさいしゅじょう あくちしき

ほとけのたま 仏 日 わく「悪象等においては畏るる心 なかれ。 あくぞうとう こころ 悪知識

ぶる。悪知識は法身をやぶる。悪象のためにころされては三 無量の意をやぶる。悪象等はただ不浄の臭き身をやぶる。 悪に至らず。悪知識のために殺されたるは必ず三悪に至る。 悪知識は浄 身および浄 心をやぶる。悪象はただ肉身をや だ身をやぶり、意をやぶらず。悪知識は二つ共にやぶる故 にあだなり」と。故に畏るべきは、大毒蛇・悪鬼神よりも、 この悪象はただ身のためにあだなり。悪知識は善法のため においては畏るる心をなせ。何をもっての故に。 この悪象等はただ一身をやぶる。悪知識は無量の身、 こころ あくちしき じょうしん あくぞうとう あくちしき こころ ほっしん あくぞうとう じょうしん いっしん ころ あくぞう ふじょう だいどくじゃ あくちしき くさ かなら さんあく ぜんぽう 悪象はた

弘法 こうぼう ぜんどう ・法然等の流れの悪知識を畏るべし。略して邪見(ほうねんとう)なが、しょくちしき、おそしょりゃく じゃけん

の失を明かすこと畢わんぬ。

の使いあまりに急ぎ 候 そうろう ほどに、とりあえぬさまに、 取 様

きょうしゃく かたはしばかりを申し候。 片 みしら もう そうろう そうろう この後、 のち また便宜に委しく びんぎ

経 釈を見調べてかくべく 候。あなかしこ、あなかしこ。

外見あるべからず 候 。もし 命 つれなく 候 わば、 げけん そうろう いのち そうら 仰せの おお

ごとく明 年の秋下り 候 いて、かつ申すべく 候 。 みょうねん あきくだ そうら もう そうろう きょうきょう 恐々

謹言。

きんげん

じゅうにがつ 十二月五日 いつか

日蓮 にちれん 花押 かおう

## 星名五郎太郎殿御返事ほしなごろうたろうどのごへんじ